

《研究ノート》

NHKテレビ番組「ブラタモリ」にみられる課題解決の過程

タモリ氏らは「旅のお題」をどのように解決しているか

達富 悠介

1. 問題の所在

NHKテレビ番組「ブラタモリ」が人気を集めている。視聴率が10%を越えることも多く、現在は第4シリーズが放送中である。この番組では、タモリ氏とアナウンサーが番組から与えられる「旅のお題」を専門家とともに解決していく。「旅のお題」は地理的な事象に関するものが多い。タモリ氏らはその「旅のお題」について、実際に歩き回りながらその土地の特徴を捉えて解決していく。

番組の公式サイトには、「ブラタモリ」の番組内容が以下のように紹介されている¹⁾。

町歩きの人・タモリさんが、“ブラブラ”歩きながら知られざる町の歴史や人々の暮らしに迫る「ブラタモリ」。ある土地のナゾに導かれ、それを解明しようと、今話題の出来事や町に残された様々な痕跡にタモリさんが出会いながら、町の新たな魅力や歴史・文化などを再発見していきます。

「ブラタモリ」は放送自体に多くの方が興味を抱いていることに加えて、学術的な評価も高い。2017年6月には日本地質学会から「地質学の社会への普及」が評価され日本地質学会表彰を受けている。その表彰理由には以下のようにある¹⁾。

この番組の特徴は、地質や地理に関する専門的な内容を扱い、その科学的意義に加え社会や産業との関わりを明らかにする構成になっている点である。視聴率が10%以上をマークする人気番組で地質の用語や考え方、その様々な意義がほぼ毎回語られる。(中略:稿者)「ブラタモリ」ではゲストとして地学の普及に関わる学芸員・研究者などが出演して、地学的な概念や地形・地質発達過程をイラストやアニメーションを効果的に用いて説明し、視聴者の理解を助けている。タモリの地理・地質好きというキャラ

クターに負う面も大きい。それ以上に、訪問地や番組構成、解説する専門家などを決定する番組スタッフの地理・地質の重要性の理解がこの番組を成功に導いていると考えられる。そしてこの番組が地質学の普及に貢献しているのは明らかである。

また、2011年3月には日本地理学会がNHK「ブラタモリ」制作チームに日本地理学会賞(団体貢献部門)を授与するなど、「ブラタモリ」はその放送内容が地理・地質に関わり、その普及に貢献しているという点で学術的な評価を得ている。

これらは、主に地質学的な立場から番組内容を評価したものであるが、教科教育学の観点からは「ブラタモリ」の課題解決の構成も評価することができる。タモリ氏らが専門家等のでびきを得ながら「旅のお題」を解決していく過程は「課題解決的な学習」と共通する点が多くみられ、学習者が主体的・自律的に活動するカリキュラムを検討する上で示唆に富んでいることが考えられる。

本稿では、タモリ氏らが番組から与えられる「旅のお題」をどのような過程で解決しているかを検討する。そして、「ブラタモリ」にみられる課題解決過程の構成から、「課題解決的な学習」カリキュラムを設計する際にも有効な視点を学ぶことを目的とする。

2. 「課題解決的な学習」について

「課題解決的な学習」とは「アメリカの経験主義理論に基づく問題解決学習・生活学習と、知識の体系に従った教師主導の系統学習とを止揚して生まれた」ⁱⁱ⁾学習のことである。

次期学習指導要領改訂を巡る議論では、社会科における「課題解決的な学習」の学習過程が「課題把握—課題追求—課題解決」の順に整理された^{iv)}。あくまで学習過程を例示するものであるとしながらも、教師に「課題把握—課題追求—課題解決」の順

を意識しながら単元をつくることを求めているといえるだろう。平成 29 年 3 月に公示された新学習指導要領では、学習者の「アクティブ・ラーニング的な学び」(＝「主体的・対話的で深い学び」)を実現するため、各教科等において「課題解決的な学習」を設定することが強調されている。新学習指導要領の改訂のキーワードになっている「アクティブ・ラーニング」を考える際にも「課題解決的な学習」は外すことはできない。小野・松下(2015)は「大学教育の質的転換の要請から、問題解決を目的としたアクティブラーニングである Problem-Based Learning(PBL)が注目を集めている」ことを指摘している^v。

「課題解決的な学習」における課題としては、課題解決までの過程に学習者の関心が向きづらいことが指摘されている。濱保・他(2014)は、学習者が「課題解決的な学習」における探求の過程より結果に対して意欲的であるということを指摘している^{vi}。その上で、濱保・他は「実験の結果よりも実験そのものに関心とこだわりをもたせるような指導を考えなければならない」としている。また、「課題解決的な学習」において設定される学習課題が教師から与えられるだけで終わっているという指摘もある。後藤(2012)は、学習課題が必ずしも学習者の学びたいことや解決したいことではなく、「教師の指導目標や指導意図、すなわち教師の教えたいこと」になっていることを指摘している^{vii}。

3. 分析の方法

「ブラタモリ」でタモリ氏らがどのような過程で「旅のお題」を解決しているかを検討するために、2017 年 4 月 22 日放送の箱根編を分析の対象とした。

分析では、まず箱根編の視聴を繰り返して内容を把握した。その後、公式サイトによる番組構成を参考に番組の展開を構造化した。そして、「旅のお題」を解決するために重要だと考えられる場面を切り抜き、出演者やナレーションの発言を適宜文字データ化した。テレビ番組ということもあり、プロデューサーの意図、作家の意図などが複雑に絡まっていることが予想されるが、ここでは視聴者本位から視聴し考察した。その後、「ブラタモリ」でタモリ氏らが「旅のお題」を解決する過程にどのような特徴があるかについてまとめた。

4. 「ブラタモリ」の課題解決過程の特徴

「ブラタモリ」の箱根編を分析した結果、「ブラタモリ」にみられる課題解決過程の特徴は次の 4 点に整理される。

4.1 「旅のお題」解決に向けた段階的な課題設定

「ブラタモリ」では番組冒頭に「旅のお題」がスタッフから提示される。この「旅のお題」はロケ本番までタモリ氏らには知らされていない^{viii}。箱根編では、「箱根の地獄が極楽を生んだ!？」が「旅のお題」として提示された。ナレーションでは、「旅のお題」について次のように説明がされるとともに、番組の方向が示されている。(05:16～)

ブラタモリ。今回の舞台は箱根。年間の観光客数はなんと 2000 万人にのぼります。温泉の他にも歴史ある神社や湖でのレジャーなど、見所満載。まさに極楽のような場所ですよね。でも、そんな地獄が極楽をつくらせてどういうことでしょうか。タモリさんが、ぶらぶら歩いて解き明かします。今日は箱根でブラタモリ。

以上のように「旅のお題」についての説明が行われ、タモリ氏らは「箱根の地獄が極楽を生んだ!？」の意味を解決するために箱根の地を巡る。「課題解決的な学習」のあり方に重ねていうと、「旅のお題」について「課題把握」し、その後「課題追究」を行うのである。

「課題追究」の過程は、次の 6 つのテーマによって区分される。

- (1) 地獄・箱根火山の全貌とは？
- (2) 温泉とカルデラの関係を源泉で探る！
- (3) 箱根火山のさらなる地獄とは？
- (4) 伝説の毒竜の正体に迫る！
- (5) 神代木を利用した“いいもの”とは？
- (6) 白濁湯の秘密を探る！

それぞれのテーマは、ナレーションの説明とともに画面左下に示されるが、ナレーションでは次のように説明している。

- 〈(1)が示された時のナレーション〉 06:34～
大涌谷の駐車場にある展望台にやってきたタモリさん。まずは地獄と恐れられてきた箱根火山の全貌を探ります。
- 〈(2)が示された時のナレーション〉 12:19～
箱根を代表する温泉とカルデラ。どんな関係があるんでしょう。タモリさんが向かったのは源泉です。
- 〈(3)が示された時のナレーション〉 17:03～
続いてタモリさんが向かったのは箱根の外輪山の西の端。ここで箱根火山のさらなる地獄がわかるんです。
- 〈(4)が示された時のナレーション〉 24:41～
ということで、再び船に乗って伝説の毒竜が暴れ回った痕跡、探しましょう！
- 〈(5)が示された時のナレーション〉 30:19～
黒い神代木を一体何に使ったんでしょう。その謎を解くため、タモリさんは温泉旅館にやってきました。
- 〈(6)が示された時のナレーション〉 34:34～
タモリさんは長尾峠からみえた山体崩壊の斜面にやってきました。ここで白濁湯のでき方がわかるというのですが……。

6つのナレーションは、それぞれのテーマについて解説を加えている。それぞれのテーマで、具体的に何を扱うかについてナレーションが解説しているのである。

6つのテーマはそれぞれ異なることがらを扱っているが、それらは独立して設定されているのではない。例えば、(3)のナレーションは、(3)のテーマではひとつ前のテーマ「(2)温泉とカルデラの関係性を源泉で探る！」を引き継ぎながら、箱根の地獄についてさらに深く観察することを示している。また、(5)のナレーションは、ひとつ前のテーマ時に扱った「黒い神代木」が何に使用されたかという謎を明らかにするために温泉旅館を訪れたことを示している。このように、6つのテーマは関連しながら設定されている。

そして、それぞれのテーマは「旅のお題」を解決するための段階的な課題を示している。(1)のテーマでは、箱根火山の地理的特徴をつかむため、その全貌を知ることが課題となっている。(2)と

(3)では、(1)で明らかになった特徴をさらに深めることが求められている。その後の(4)や(5)では、それらを踏まえて、「神代木」や「白濁湯」にテーマを絞り、人間の生活に関連する課題が提示されている。これらの課題は、タモリ氏らが「旅のお題」を解決できるように、箱根火山についての基本的な情報から核心的な情報へと導いている。つまり、ナレーションを伴ったそれぞれのテーマは、段階的に追究すべき課題を提示する機能を有し、「旅のお題」の解決に向けた課題解決過程を展開しているのである。

4.2 多様な資料の読み取りから生まれる疑問と気付き

課題追究の過程では、段階的な課題を解決するために、多様な資料の読み取りが行われる。箱根の実際の地形はもちろん、安土桃山時代に書かれた絵巻や魚群探知機、コップにくみ取った池の水などがその対象となっている。情報が案内人からタモリ氏らへ与えられるだけではなく、タモリ氏らが主体となって資料から情報を獲得していることがわかる。

また、番組内ではタモリ氏らが資料を読み取り疑問や気付きを抱いた際に「？」や「！」がテロップとして表示される。これらのテロップは、タモリ氏らが抱いた疑問や気付きを、段階的な課題の解決の手がかりとして課題解決過程に位置づけることに機能している。案内人が番組進行に合わせてタモリ氏らを案内するだけではなく、タモリ氏らの疑問や気付きが課題解決過程において重視されているのである。

4.3 出演者(と視聴者)の経験に寄り添った番組の編成

番組の編成に注目すると、課題設定から課題追求、課題解決に至るまで、出演者と視聴者の経験に寄り添っている。ここで視聴者を加えたのは、視聴者の存在を度外視できないテレビ番組としての特性を踏まえている。

まず、「箱根編」で扱っている地理的な事柄については、出演者(と視聴者)の既有知識との関連が意識されている。例えば、番組冒頭部分で箱根火山の全貌が説明される際には、次のような会話

が展開している(07:25～)。

案内人 箱根っていうのは、いろんな山々の集まりなんですよ。(中略)あれからずっとつながってますよね。というわけでこれぜんぶ箱根火山。で、このぐるぐるって山はなんていうかご存じですか？

タモリ これなんていうかわかりますか？

近江アナウンサー え！？

テロップ 突然の試練！

タモリ ちょいちょい聞く名前。

近江アナウンサー 外輪山？

案内人 ああ！！素晴らしい！

テロップ たいへんよくできました

近江アナウンサー やった～

案内人 じゃあ、外輪山の内側はなんていうか？

近江アナウンサー カルデラ！

案内人 ああ！素晴らしい。

タモリ すごいですねえ。

テロップ 成長してます♪

ここから、この案内人は、箱根火山にみられる外輪山やカルデラといった事柄を近江アナウンサーの既有知識と関連付けながら説明を行っていることがわかる。近江アナウンサーは、すでに火山を囲む山々を外輪山と呼ぶことや外輪山の内側をカルデラと呼ぶことを知識としてもっていた。案内人は、近江アナウンサーのこのような既有知識と関連させながら箱根火山の解説を展開している。

また、課題追究の過程では、観光地として有名な温泉や芦ノ湖が登場する。温泉や芦ノ湖は箱根からイメージされやすい観光地であり、タモリ氏や視聴者にとってもなじみがある。番組では箱根を地理学的な視点から解明していくが、学術的な分析だけでなく箱根にもっているイメージと重ねながら課題追究を行っているのである。

このように、課題解決までの過程は、出演者(と視聴者)の既有知識や箱根のイメージなどの経験に寄り添いながら編成されている。

4.4 課題追究を経て変容した社会的事象について

での認識

タモリ氏らは課題追究を経ることで社会的事象についての認識を変容させている。箱根編では、タモリ氏らは箱根についての認識を変容させている。

タモリ氏らは課題把握の段階では、硫黄が吹き出す火口をみて「箱根＝地獄みたい」というイメージをもっていた。その後、課題追究を経て、番組終了前には次のような会話が展開している(42:46～)。

案内人 最初にここをみて地獄なんて言っちゃいましたけど、地獄で働いてる方がいて。

タモリ 地獄で極楽をつくって。

案内人 極楽をつくっていただいているという事です。

タモリ 地獄の力で極楽をつくる。

案内人 そうなんですよ。

ここでは、課題把握の段階では与えられた問いでしかなかった「箱根の地獄が極楽を生んだ!？」という「旅のお題」について、課題追究を経た後でもう一度立ち戻っている。そして、課題把握の段階で抱いていた「箱根＝地獄みたい」という認識が変容し、「箱根の地獄」が「極楽を生んだ」ことを理解することができたことを確認している。

また、課題追究の過程で箱根の認識が変容したことで、これからの行動が変化することについて次のように話している(43:18～)。

タモリ すごい。やっぱり箱根は全部回らないとわかんない。全部回らないとね。規模がでかいからね。

近江アナウンサー たまごだけ食べてちゃだめですね。ここでそんな大変な作業をしてくださったとは全然知らなかったですね。全然箱根のこと知らなかったです。

タモリ 箱根すごいよ。一カ所行って帰るのは惜しい。

近江アナウンサーは、再び箱根を訪れた際には「たまごだけ食べてちゃだめ」だということを述

べている。近江アナウンサーにとって、これまで箱根は「たまご」のイメージが強かったのかもしれない。しかし、課題解決過程を経ることで、「たまご」以外の箱根の特徴を知ることができた。タモリ氏は「一カ所行って帰るのは惜しい」と述べている。タモリ氏も、再び箱根を訪ねる機会があったら一カ所だけで観光して帰るのではなく、より多くの箇所を巡ることを思案しているとみられる。このように、課題追究を経ることで、タモリ氏らの箱根への認識が変容したことが伺える。

5. まとめ

これまで、「ブラタモリ」箱根編にみられる課題解決過程の特徴を4つに分けて整理した。この4つをまとめると図1のようになる。

「ブラタモリ」にみられる4つの特徴は、視聴者にタモリ氏が「旅のお題」を解決する過程を楽しませる工夫でもある。これらの工夫によって、視聴者は番組から提示される知識をただ受けるだけでなく、タモリ氏らが課題解決している過程に探求的な関心を抱き、自らも課題追究しているような感覚になるのではないだろうか。

この「ブラタモリ」箱根編にみられる課題解決過程の特徴を「教室の学び」に重ねるには、学習目標に関わらせた検討が必要となるが、タモリ氏らや視聴者の興味を惹きながら課題を解決している点で学ぶべきことが多いと考える。「旅のお題」について追究し解決しようとするタモリ氏らを学習者、番組の展開を構成する立場を教師と考える

と、箱根編を分析することで明らかになったことは、課題解決型の授業を構想する教師の意図と類似した傾向があると考えられる。それは以下の4点である。

- (1) 教師は、単元で解決すべき学習課題を設定するとともに、学習者が段階的に課題を追究できるようなテーマを提示するようにする。
- (2) 教師は、学習者が様々な資料から必要な情報を読み取り、新たな疑問や気づきを得られるようにする。
- (3) 教師は、学習者の経験や生活に関連した活動を設定する。
- (4) 教師は、活動の前後で学習者が知識や概念についての認識を変容できるような活動を設定する。

以上のような教師の意図（工夫）は、これまでの先行研究で指摘されてきた「課題解決的な学習」の課題を解決する上で有効な視点となりうると考えられる。すなわち、学習者の意欲が課題解決の過程ではなく結果のみに向いてしまうことや学習課題が教師の「教えたこと」になってしまっていることなどの課題を解決するためのひとつの手がかりとして、以上のような視点は有効であると考えられる。

このように、「ブラタモリ」箱根編にみられる課題解決過程の特徴は、「課題解決的な学習」カリキュラムを設計する際の視点としても有効であると考えられる。



6. 今後の課題

本稿では、「ブラタモリ」にみられる課題解決過程の特徴について、箱根編を分析することによって考察することができた。これまで地質学的な立場から評価されてきた「ブラタモリ」であったが、教科教育学的な立場からも評価することができた。「課題解決的な学習」が求められる今日の教科教育において、カリキュラムを検討する際の視点を得る手がかりとなると考えることができる。

「ブラタモリ」を検討するにあたって、分析の対象が箱根編だけになってしまったのは今後の課題である。今後は、複数の放送回を比較し検討することで、より詳細に「ブラタモリ」にみられる課題解決の過程を明らかにしていく必要がある。稿を改めて論じたい。

付記

(1)

NHKは、学術研究を目的として放送番組を引用する際は、以下の5つの条件を満たすことを求めている。(NHKホームページ「教育・研究目的でのNHK番組の利用をお考えの方へ」<https://www.nhk.or.jp/nijiriyoku/kyouiku.html> 最終アクセス 2017.12.10)

1. NHKの録画番組を引用する必然性があること
2. 引用の範囲が必要な限度内であること
3. 著作物と引用するNHKの録画番組との主従関係が明確であること(録画番組が従になること)
4. 著作物とNHKの録画番組から引用する部分が明確に区分されていること
5. NHKの録画番組からの引用であることを明示すること。

本稿では、NHK番組「ブラタモリ」の独自性と教育的価値を尊び、本研究を進めるにあたって必然性のある部分を最小かつ適切な範囲のみ、改変することなく引用し、その部分と本論文執筆者の著作部分とを明確に区分して使用した。そのため、

以上の5つの条件は十分に満たしていると考えられる。なお、本稿に引用した放送画面切り取りは、すべて初回(2017年4月22日)放送を切り取ったものである。

(2)

本稿は、平成29年8月10日に行われた第3回知識基盤社会研究会(横浜国立大学高木まさき研究室)における題目「NHKテレビ番組『ブラタモリ』から『課題解決的な学習』のあり方を学ぶ」の発表に、加筆・修正したものである。

ⁱNHK公式サイト「ブラタモリ 番組紹介」

<http://www.nhk.or.jp/buratamori/cast.html> (最終アクセス 2017.12.10)

ⁱⁱ日本地質学会公式サイト「2017年度各賞受賞者受賞理由」

<http://www.geosociety.jp/outline/content0180.html> (最終アクセス 2017.12.10)

ⁱⁱⁱ森久保安見(1991)「課題解決学習」,国語教育研究所編『国語教育研究大辞典 普及版』明治図書

^{iv}教育課程企画特別部会(2015)「論点整理」平成27年8月

^v小野和宏,松下佳代(2015)「【歯学】教室と現場をつなぐPBL—学習としての評価を中心に—」,『ディープ・アクティブラーニング 大学授業を深化させるために』勁草書房

^{vi}濱保和治,岡田大爾(2014)「探究意欲を高める動機付けに関する実践的研究—探究学習におけるものづくりの有効性の検証」『広島国際学院大学研究報告』47,pp.11-26

^{vii}後藤昌幸(2012)「国語科学習における「学習課題」の位相—一九八〇年代から現在をとらえる—」,日本国語教育学会『月刊国語教育研究』481,pp.32-35

^{viii}NHK「ブラタモリ」制作班・監修(2016)『ブラタモリ1 長崎 金沢 鎌倉』角川書店

(横浜国立大学大学院教育学研究科)